6月のボランティアリポート

局アナnetでは、東日本大震災の被災地でのボランティア活動への参加を呼び掛けています。これは、メンバーの中尾香さん（元NHK仙台）からの情報をもとに、公益社団法人危機管理協会が企画する「心のケアプロジェクト」（第一回＝4月）にグループで参加するものです。
第四回、第五回が実施された6月の活動について、参加した皆さんからお寄せいただいた感想を以下に掲載いたします。

2011年6月11日（土）

第五回「心のケアプロジェクト」

場所：宮城県女川町　女川総合体育館
局アナnetからの参加者：4名

撮影：中尾香さん

東日本大震災から3か月がたち、
はじめて被災地へボランティアとしてお邪魔させていただきました。
まずは、受け入れてくださった女川町の皆様に心から感謝申し上げます。

今回は、避難所の子どもたちが登校中で不在だったため、絵本の読み聞かせはやめて、
傾聴ボランティアとして、大人の皆さんの心の内を少しでもお伺いできたらと思い、
活動を切り替えました（状況によっての臨機応変さは必要ですね）。

訪問先の女川町総合運動体育館では、
およそ700人の皆さんが避難生活をしていました。
段ボールで区切られたスペースの中で、日中だったのですが、
横になって休んでいる方が目立っていました。
どうしたのかなと思い、腰を伸ばしているおばあさんに訪ねると、
「今朝、お墓参りにいってきたんですよ」と、
ぽろぽろ涙を流しながら教えてくださいました。
家族と会えなくなってしまって丸3か月、復興のために前を向きたいけど、
きょうは涙を流す、という特別な一日だったのです。

これから復興に向けて、本当に必要な支援は何なのでしょうか。

あるおばあさんは、以前のように畑仕事がしたいな・・。
ある男性は、仮設住宅に入りたいけど、光熱費は自己負担なんだよね・・・。

農業をやっていた方には、再び農業ができるように、
光熱費を不安なく支払えるように、仕事ができるようになることなど、
ただただ、元の暮らしを再スタートさせたいという気持ちを教えていただきました。

女川町の皆さんとお話しをさせていただきながら、
私は、7年前に他界した山形の祖父母を思い出しました。
90歳近い高齢でしたが、いつも畑仕事を楽しんでいましたし、
祖母にいたっては、腰が曲がっていたのに、
リヤカーを引っ張って行商を続けていて、働くことが大好きでした。

被災者の皆さんは、働きたくてうずうずしています。
東北は必ず復興します。
地に足をつけた生活を一日も早く取り戻せるような支援を影ながら続けていきたいと、
私は学ばせていただきました。

峰田　雅葉
（元　NHK千葉）

今回は、なんと・・・小学生の子供たちが午前中に学校に行っているとのこと。
紙芝居なっちゃん、ピンチ！と思いましたが・・・
今まで数々の場所で行ってきた被災地での支援活動で、
紙芝居が大人の皆様にも喜んでいただいていることを実感していたので
大人の方も親しみある、日本や世界の昔話を中心に紙芝居をしました。

今回は、前回の主な活動スペースにしていた1階部分も使用許可が出なかったので
あちこちのスペースを歩き回って、
普段ストリートでしている紙芝居スタイルのように行いました。
それが功を奏したようでした。
より、被災された方との距離感を縮めた紙芝居をすることができました。

中谷　奈津子
（元　NHK金沢）

メイクやネイルの順番を待つお母さま方や、ベンチで座っているお父様。
誰もいないところでも紙芝居していると、
通りすがりの親子やお父様が最後まで見てくださる。
小さな赤ちゃんは、私のおじいちゃん声に キャッキャキャッキャ声をあげて笑ってくれる。
避難所のあるご家族とお友達になり、居住スペースにお邪魔し、
お茶と牛丼を一緒に食べ、小さな愚痴もいっぱい聞いて、
普通のガールズトークのようなノリになり・・・
「ホヤばくだん」とよばれる郷土料理の話や、
既に仮設住宅に住んでいる被災者の方が、
夜になると、わざわざ避難所に戻り お友達の居住空間に居候しているという
話も聞きました。（一人で眠れない、寂しいといってやってくるのそうです）
今回は、よりパーソナルな部分での活動が出来ました。

そのおかげで、紙芝居見てくださった皆様が「なっちゃん」「なっちゃん」と声をかけてくださり、
とあるおかあさまは「70年ぶりに見た！」と 満面の笑みでハグしてくださいました。
帰り際には、現地ボランティアの方にも即席で紙芝居をさせてもらい、
喜んで頂けて私も嬉しかった。

また、私の故郷である石川県の保健所の方も ボランティアで常駐されていました。
思わず、金沢弁で会話してしまいました。
まさか女川で、自分の故郷を想うことができるなんて。
「ふるさと」を支えに想う「郷土愛」を実感しました。
被災者の方々が、ここまで我慢強くいらっしゃるのは、「郷土愛」があるから。
それを気づかせてくださいました。

最後は、震災が起きた時刻に合わせ現地で黙祷。
その静寂の中には、悲しみと決意の空気が流れているのを はっきりと感じました。
涙が止まらず、泣き声を必死に堪えました。
それでも、女川の皆さんは、前を向いています。
挫けそうになりながらも。その前向きな気持ちに寄り添って、
これからも 紙芝居での支援活動を続けようと誓って帰途につきました。
毎回、支援の活動をさせてくださって
小田さん、中尾さん、危機管理協会さんには 感謝してもしきれません。
ありがとうございます。

■ブログURL：http://ameblo.jp/naka725

現地ボランティアの女性が
「なっちゃんの紙芝居が見たい！」と言ってくださり
その場で紙芝居をした記念の一枚です。

2回目の訪問となった女川町・・・4月に訪れてから1ケ月半近く経ちますが、
どれだけ状況が前進しているのか、雲を掴むような気持ちで現地入りしました。

車中から見える景色は、想像以上に大きな変化を遂げていませんでした。
とは言うものの、至る所がれきの山だった町中からがれきの山が減り、
川の両岸に流れ着いた多くの浮遊物は撤去され、所々に仮設住宅らしき建物を望むことができました。
少しずつの変化ですが、日々そこで頑張っている人たちの
前向きな「力」を感じることができたのは事実です。

避難所となっている女川町の体育館に入り、以前とは全く違った空気を感じ取ることができました。
これも避難所で生活されている方々が生み出す、大きな変化なのだと思います。
重々しい空気が、どことなく生活感のある空気へと変化していました。
また、きちんとメイクをされている女性の方と何度もすれ違い、
皆さんの気持ちが少しずつ前に動き出しているのを、その様子からも感じとることが出来ました。

絵本と歌によるケアを今回も予定していましたが、子供たちは学校があり不在だったため、
今回は大人向けの詩集と詩画集を読んでお話をしました。
また歌を歌う時には、周りの方の迷惑にならないように…との被災者の方からの希望で、
その場で小声で歌わせて頂きました。
やはり24時間、常に周りへ最大限の気を遣いながら、この3ケ月間生活されているのを肌で感じました。

目に見える変化もあれば、家族を亡くされた方などは、
まだまだそこまで気持ちが追いつかない…というのも事実です。
旦那さんを亡くされた女性は、私が詩集や歌を歌っている間もずっと涙が止まらず、
深い悲しみを抱えて苦しんでいるご様子でした。
ただ、そばで寄り添っていることしか出来ませんでした。
その方が、私が詩集を読んでいる間、同じ言葉を何度も何度も呟いていたのが忘れられない。
「やっぱり…その人には誰か支えてくれてる人がそばにいるんでしょう…」と。
逆に解釈すると「私にも支えがなければ生きていけないのよ」…ということを
必死に訴えていらっしゃったのだと思います。
別れ際に、柴田トヨさんの詩集「くじけないで」を、
遠慮がちに「ありがとう」と受け取って下さった姿が、今でも忘れられません。
ページをめくる日はまだ先かも知れません。
でもあの女性に、生きる希望を与えてくれる一節がひとつでもあるのなら…と
願わずにはいられません。

そして歌によるケアでは、以前訪れたことを覚えていらっしゃった方が多く、
受け入れてくださったことが幸いでした。
「始まりますよー」の声に、わざわざ一番前まで出てきて参加して下さったお婆ちゃま、
リズムをとりながら一緒に歌を歌って下さった方、リクエストまで声掛けして下さった方、
本当にありがとうございましたと伝えたいです。
帰り際には、「私たちは、まだ8月までいるから、また来てね。」や
「お姉さんの声が好きなんです。また来てくださいね。」と、
4月にお会いした時には全身に悲しみを背負ってらっしゃって
声を掛けることも出来なかった男性がお話してくれました。

桐田　咲智代
（元　札幌テレビ）

やはり、続けていくことに意味があるボランティア活動だと、
行くたびに皆さんから教えられます。
今回の訪問は、震災から3ケ月目という節目の日でもあり、
避難所の被災者の皆様と共に1分間の黙祷を捧げられたことがとても意義深い瞬間でした。
最後に、毎回活動を指揮して下さる「危機管理協会」の皆様、
炊き出しで多大なご協力を頂いた「吉野家」皆様に感謝を込めて、活動報告とさせていただきます。

女川の避難所へ伺うのは、今回が2回目になります。

前回はプロジェクトそのものが初回ということもあり、
被災地で暮らす皆様のために自分に何が出来るのか、手探りでの活動でした。
想像以上に、震災が人々の心に落とした闇が大きく、
自然の猛威の中では人間がいかに非力かを思い知らされました。

あれから、更に一ヶ月半。
避難所の皆様が元気に暮らしていらっしゃるか、ずっと気がかりでした。

今回も4月に伺った時と同じ、小雨の降る中での訪問となりました。
以前伺ったときは、震災からまだ1ヶ月ほどしか経っていなかった事もあり、
皆様の面もちも硬く、重い空気が避難所を覆っていました。
声をかけることが良いことかどうか躊躇ってしまうほど、みなさんの心は悲しみに溢れていました。

ところが、どんよりとした天気とはうってかわって、避難所へ入ると少し柔らかい雰囲気・・・。
今回は、避難所の皆様から先に声をかけてくださいました。
「あら。前に歌を歌ってくれたお姉さんだよね？？」
「まあ～。遠いのによくまた来たね～。」など・・・。
覚えていてくださったのが、とても嬉しかったです。

避難所での活動は読み聞かせや傾聴の他、
音楽療法経験者の桐田さんと一緒に、童謡や懐かしの歌をうたっています。
皆さんと一緒に歌うことで気持ちを共有し、声を出すことでストレス発散になりますので、
そのお手伝いをさせていただいております。

４月に伺ったときは、みなさん歌いながら涙を流されていましたが、
今回はにこやかな笑顔で歌い終えることができました。

別れ際に
「後少しで仮設住宅に入れるのよ・・・。後少しの辛抱なのよ・・・。」
と、目を腫らしながら想いをうち明けて下さる方。

「８月までいるから、また来てね！」
と、明るく声をかけてくださる方。

皆さんが、一生懸命心の整理をつけて頑張ってきたのがよく分かりました。
ゆっくりではありますが、復興に向かって着実に前進しています。

午後には雨も上がり、青空が広がりました。
帰路につくための準備をしていると・・・

地震が発生した14時46分。女川中、被災地中にサイレンが響き渡りました。
あれから、三ヶ月が経ちました。

女川の復興を・・・
震災で被害に遭われた方々の魂が安らぐことを・・・
ただただ、祈るばかりです。

■ブログURL：http://ameblo.jp/kaori-nakao/

中尾　香
（元NHK仙台）

2011年6月28日（火）

第五回「心のケアプロジェクト」

場所：福島県　土湯温泉
局アナnetからの参加者：1名

公益社団法人危機管理協会主催の「心のケアプロジェクト」。ようやく2度目の参加が叶いました。

訪問先は、福島市の土湯温泉。
福島県の南相馬市と浪江町から約700人の方が疎開し、避難生活を送っています。
南相馬市も浪江町も、東電福島原発の30キロ圏内にある強制避難地域で、
3.11には大地震と巨大津波に襲われた自治体。
温泉街の旅館やホテルで、家族ごとに個室が割り当てられ、生活しています。

前回訪問させて頂いた女川では、広い体育館をダンボールで仕切る避難所生活を目の当たりにしたので、
同じ「避難所」でも置かれている環境は様々に違うということを、認識させられました。

現地では、浪江町が温泉街の一角に設けている託児室「子育てサロン」と、
避難所となっているホテルのロビー、
プロジェクトに共に参加した美容師さんがヘアカットのボランティアをしている大広間の片隅で、
持参した絵本や、協力団体の方から提供して頂いた本の読み聞かせをさせてもらいました。

子供達はボランティアにも慣れているのでしょう、初対面の大人にもすぐに打ち解け、
「次はこれを読んで」とねだったり、本を読んでいる膝の上に座ってきたりと、
好奇心旺盛で元気一杯の様子に、たくましさと頼もしさを感じました。
「面白かった」「楽しかった」という子供達の声が嬉しかったです。

ただ、あるお母さんからは、今でも、少しでも揺れたり、緊急地震速報の音が流れたりすると
ものすごく怖がってお母さんから離れないという4歳の女の子の話、
中学1年のお姉ちゃんは、新しく買い揃えた制服もカバンも無くなってしまい、
中学3年のお姉ちゃんは、楽しみにしてた中体連の試合も修学旅行も無くなってしまい、
二人にも随分泣かれたという話を聞きました。
一見元気に見える子供達ですが、
心の中には、目に見えない色々な傷が、未だ癒えずにあるのだということも痛感しました。

一家は近く茨城に移ることにしたそうです。
「親戚も誰もいない所に行くなんて・・・」とポツリとこぼしたお母さんの心の内にも、
不安、諦め、憤り等、言葉にできない複雑な感情があるように見えました。

先の見えない避難生活を送る方たちの力になるにはどうしたらよいのか、
出来る事はほんの僅かでも、考え続け、行動し続けたいという思いを新たにしました。

■ブログURL：http://ameblo.jp/tomosvoice/

中村　朋絵
（元NHK金沢）

2011年6月11日（土）
宮城県女川町写真

（撮影：中尾香さん、桐田咲智代さん）

局アナnet
kyokuana.net